

2022年11月15日

2022年9月25日、国際幼児教育学会第43回大会（2日目）において、絵本部会では、「共に生きるかたちの再考—Storytimeでひとを結びコミュニティを創造する試み」というテーマで、石川由美子会員にご講演いただきました。石川さんは、宇都宮大学共同教育学部教授として、また宇都宮大学附属特別支援学校の学校長としての多忙な業務の傍ら、那須塩原市の私立図書館「みるる」で、学生や地域ボランティアの方とともに、Storytimeの実践に取り組んでおられます。以下、講演会の内容について報告します。

まず、石川さんが関わってこられた、絵本の発達順序性研究の成果をご紹介いただきました。絵本を介して子どもがどのように育っていくのかを明らかにしようとした一連の研究から分かったことは、子どもの育ちが、絵本の読み聞かせだけで生じるわけではなく、日常生活の経験や体験を前提としたり、それらと関連付けられたりすることで生じる、ということでした。絵本だけ子どもに与えても十分ではなく、絵本の文脈が生活や絵本を読み合う活動の中で与えられることが重要だというわけです。

そして、それらの知見をふまえ、NYの図書館などで実践されているStorytimeの活動に着想を得て、石川さんは、「みるる」での実践に取り組むことになったのです。

Storytimeの活動は、絵本を共有した大人と子どもの活動です。石川さんのStorytimeは、「絵本の文脈を最大限利用して、大人も子どもも遊んじゃおう！」がテーマで、多民族社会を背景にリテラシー獲得が重要な役割であるNYのStorytimeよりも遊び要素が多めですが、遊びの中でこそリテラシーや情動が育まれるということは前述の通りです。特定の物語・絵本を核として、制作、ごっこ遊び、歌やダンスなど、さまざまな遊びが展開されます。それらは、環境についての注意深い配慮のもと実施されています。

講演では、Storytimeに継続参加している一人の子どもに、自作の歌を歌う、お話を作りながら絵を描く、文字を書いてみる、といった高次精神機能の発達が、非常に短い間に見られた様子が、実際の動画を交えて分かりやすく示されました。また、Storytimeの何が子どもたちにポジティブな影響を与えるのかを、第三世代活動理論にあてはめて分析してくださいました。絵本と絵本に関わる活動の意義が、理論とエビデンスを伴って鮮やかに示され、絵本部会メンバーとして非常に心強く感じられました。

石川さんは、講演タイトルにもある「共に生きる」ということが、SDGsの根幹であると主張されます。Storytimeの活動が行われるのは、週末、マルシェが開かれ、さまざまな人でにぎわう、駅すぐ近くの図書館——コミュニティの豊かさを感じられる場所です。また、Storytimeの活動では、研究者、図書館職員、地域ボランティア、留学生を含む学生など、多様性に富むメンバーが議論を重ね、葛藤を乗り越える経験もされているとのこと。コミュニティの中で生活する多様な人々が集い、創りあげるからこそ、Storytimeの取り組みが、子どもの成長を支えるものとなりうるのだと実感できました。（上田智子）